

ちょっといい話

大河ドラマの題字なんて、命運がかかっている仕事でしょう。ドラマの命運も、NHK自体の命運も。そんな時はやっぱり本質に帰るべきなんだね。精一杯、まっすぐ、正しく、力強く、そういう字を書かないといけないなって。(左官・挾土秀平さん)

どんな強い人でも、8割勝った人はいない世界。負けること、うまくいかないことには慣れています。勝った対局は過程がまずくてもいいかなと思ってしまいがち。負けた対局には理由があり、課題が見えやすい。(囲碁棋士・井山裕太さん)

品川の教育

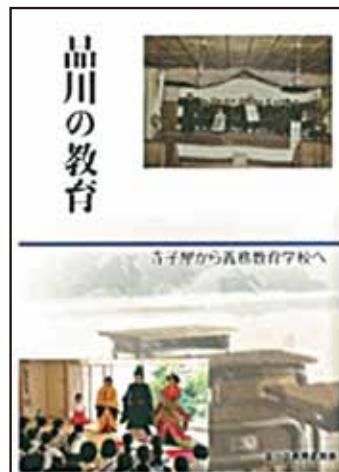
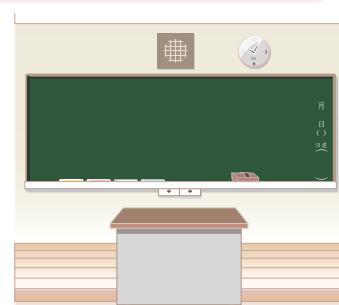
前号に引き続き、品川区教育史「品川の教育」を読み進めてみます。

学校教育改革の取り組み「プラン21」

公立学校の信頼回復と教育改革の必要性について「変わりたくとも変われない学校を、変わらざるを得ない状況に追い込む」「公立学校は社会や子どもの変化に正対できず、これまで聖域化してきた学校という殻に閉じこもり、理想化された教育論の視点からのみの改善に終始」「この保守的で独りよがりな学校的体質を根幹から変えなければ、子どもたちが今日の社会の中で生きていく上で必要とされている確かな学力と豊かな社会性・人間性を身に付けさせる教育を保障することはできない」（「品川の教育」より）

平成11年8月に、教育改革の基本的方針と具体的方針を示した「プラン21」が決定しました。その冒頭の記述です。教育基本法など国で定められた法律や学習指導要領に基づいて、公教育が全国一律で同じ内容で行われる中、品川区が文科省に挑戦状を渡した、といったら言い過ぎでしょうか。「追い込む」「殻に閉じこもり、理想化された教育論」「独りよがりな学校の体質」「教育を保障することはできない」… どうでしょう、随分と過激に公教育、というよりも学校のあり様を批判しています。

制度や理念に子どもをあてはめるのではなく、子どもたちが社会で生きていくための力をどう育んでいくのかを構想し、具體化することが必要と考えた、当時の若月教育長の独自の切り口が端的に表されているものと感じます。評価はともあれ、文部科学大臣秘書官などを歴任していた文科省官僚が、平成21年から3年間、大崎中学校の校長に赴任するなど、日本の教育界にとってはまさに衝撃的な品川区の取り組みであったことが分かります。



しながわ
ワクワク新聞 第120号

発行日：
平成28年10月1日(土)
発行者：
若林ひろき 品川区議会議員
ブログ：
[http://ameblo.jp/
wakabayashi-hiroki/](http://ameblo.jp/wakabayashi-hiroki/)



インフルエンザ予防接種高齢者向け助成

方、**対象者** 昭和26年12月31日以前に生まれた
方、**料金** 60歳～64歳の方で障害者手帳1級程度の
方、**接種できる期間** 平成29年1月31日まで
【問合せ】 2500円（期間内1回）
品川区保健所保健予防課

☎ 5742-9152



また、怒りと憎しみを区別している。怒りが突発的、爆発的なものに対して、憎しみは継続的、習慣的なものだと喝破しているのです。松下幸之助さんも、部下の失敗に対して激怒したもの、憎しみを抱いていたわけではない。正義に基づく「正しい怒り」は、恨みや憎しみとは違うのです。突然的な怒りを憎し、みと勘違いしないよう、また、怒りをこじらせ、て憎しみに変えないよう、注意を払うことが必要です。ストーカー、レベルの話から、極端な話、ナチスドイツのユダヤ人虐殺のようなことが起こってしまう可能性もあるのです。(つづく)

哲学者三木清の「人生論ノート」には、「神の怒はいつ現われるのであるか、」「正義の蹂躪された時である」「切に義人を思う。義人とは何か、「怒れることを知れる者である」。正義を貫く人つまり「正しい考え方」を持つ人は怒ることを知つていいると、三木清も考えていたわけです。

私の本棚